

人が集まる楽しい癒やし空間、郷土を体感、繋がるロマン

県庁周辺エリア・アイデア・コンペ応募（整理番号 23）

2024 年 10 月 23 日

前置き

（きっかけは、18 歳に「富山ってどんなところ？」）

自分の体験では、県内高校から都会に進学して、自己紹介し合う際に、「富山ってどんなところ？」と訊かれて、いざとなると、具体的に要領良く説明できず、戸惑い窮することが幾度かあった。

富山県は、自分が生まれた郷土であり、個別な事柄は知っているはずなのに、**全体像としての概要**については、現実には他人に分かり易く説明となると、簡易にまとめることが困難な例の典型と言える。

（目指すのは「ゆとりで富山を簡潔にまとめて理解できる拠りどころ」）

富山県の地勢、観光、文化・伝統、産業、県民性など自然条件と人間活動を歴史的な背景と経過を踏まえた上で、その特徴や特質などを、県民だけでなく来県者にも、リラックスした心のままで、分かり易く、簡潔にまとめて理解してもらうための拠点エリアとして、例えば「郷土を体感、繋がるロマン」を謳い文句に、「人が集まる楽しい癒やし空間」を、効果的に整備することを提案する。

1 整備の方針と概要 県庁前公園を含む広い緑の空間づくりと情報発信並びに地下駐車場として活性化

緑の空間の中に、情報拠点施設として低層で開放的な建物を（NHK跡地付近）に設置して、とやまの基礎的（観光、産業、文化、伝統等）かつ基本情報を発信するとともに癒やし・休憩の場を提供する。

（1）拠点建物のイメージは、緑の空間の中にある透明外壁の駅裏スタバ

拠点施設の建物は、小規模かつ低層（地下を含む2階建て程度）の開放的（景観世界一との評価のある駅裏の富岩運河還水公園のスタバが一例）なものとし、周囲に圧迫感を与えないよう配慮をする。

富山県全体を紹介するために、簡潔で理解し易い情報提供を目的とし、画像パネルと簡単な説明、最新機器の動画映像などをはじめ、来訪者が自分で探求し、楽しむことができる内容とする。

そして、施設は県が設置しても、運営は民間に任せるのがよい。なお、民業圧迫を避けるため、みやげ品などの物販は極力行わず、特産品等のPRと購入可能な店舗の紹介のみに留める。

ただし、休憩客のため、企画競争により（趣旨を理解する）喫茶サービス程度の民間の営業を認めるものとする。また、説明などには、ボランティア案内人など県民に協力を求め、その活用を図る。

なお、このエリアは危機管理及び防災の観点では、最重要地なので、将来の核シェルター整備も視野に、支障や手戻りの回避に留意しつつ、万一の際には避難所利用を念頭に設計を行うことが必要である。

（2）建物の周囲は緑、県庁前の噴水を廃止し、芝生や樹木を植え、公園にする

建物の周囲全体は、そのような危機管理や防災用の用途などは、一般利用者の視野には秘めたまま、緑の景観で癒し・憩いの空間を提供し、訪れる人をリラックスした開放的な気分させることを優先する。

さらに、平常時には、屋外で小規模なイベントや集会のため、無用な施設をつくることなく人々が集うことができるような空間にして維持すれば、災害時の避難場所や救援拠点として大きな効果を発揮する。

なお、現在の巨大噴水は、水に恵まれた富山県を象徴するものとして、そのPRの趣旨で作られたはずだが、これに類するものは、駅裏の還水公園や県庁舎南の松川の水辺に集約させるのがよいと思われる。

（3）県庁前公園の地下は、当分の間、駐車場とし、前掲の拠点建物と地下で結ぶ。

ア 東西にマイカー利用の出入り口 駐車場の出入り口は、東側（市役所前大通り）及び西側（電車通り）の両サイドからの進入を可能とし、県庁や県民会館利用者の駐車場不足を解消し、利便向上を図る。

イ 将来、富山駅と地下で結ぶ、駐車場は、周囲の既存の地下施設を有する県民会館、富山市役所、農協会館と地下で結ぶよう調整を図る。また、将来、長期的に富山駅前方面への連絡の利便を図るため、駅前C i Cビルの地下街まで、地下通路（約350m）で繋ぎ、一般に供用すれば、県都において中心市街地との間を往来する通勤客はじめ、厳寒の豪雪時や逆の猛暑・炎天下の通行人に多大な利便をもたらす。

併せて、全国でも気候が悪く日照時間が最短レベルの本県において、新幹線を利用して来県された県外客らが、JR富山駅から徒歩で中心市街地に向かう際、飛躍的に回遊性の向上が期待できるであろう。

さらに、地下道は、簡易なシェルター的効果も兼ねるほか、壁面の広告スペースと照明により、季節と昼夜を問わず、文字通り明るい街で活気が生まれ、広告料収入で、維持費の一部も賄うことができる。

（4）大型観光バスの駐車と発着は、電車通り側の屋外に

年間を通して観光バスを利用して、このエリアを団体で訪れる可能性のあるのは、小中学校の郷土理解のための教育活動（小遠足）が想定され、また、季節的には、県内外からの観光ツアー団体客などが、期待できる。そのため、屋外（例えば、現在の花時計から南）に、観光バス（数台分）の駐車スペースを確保するのがよい。（バスを地下駐車場から排除すれば、天井高を低くして建設コストを抑制する効果もある。）

これにより、年間数回の「県政バス」事業参加者をはじめ、県庁や県民会館への団体来訪者が利用する大型バスが、エリアの道路上に長時間駐停車することを避け、円滑な道路利用を図ることができる。

（5）施設整備の主体は県であるが、拠点施設の運営には広く外部の知恵を

ア 運営には市町村並びに業界、関係団体との協力が不可欠

施設整備は、県が主体となるが、運営には、県が推進的な役割を果たすが、展示内容や情報提供には、市町村と業界団体の協力と意見の反映が大切であり、第三セクターの利用も考慮に入れる。

イ 既設の関係施設・機関との調整

駅前C i Cビルの1階で営業中の「ととやま」（三セクの県いきいき物産（株））との役割分担並びに（公益社団）とやま観光推進機構などとの一体的運用又は連携協力を考慮する必要がある。

ウ 意思決定機関 その理事会等は、構成団体のトップで構成されるとしても、実質的運営は、自治体の部課長、民間の専務又は事務局長級による運営委員会が機動的に活動するのがよい。

2 このエリアは旧神通川本流の旧河川敷につき、舟橋や灯籠などの面影を復元

嘗て神通川の本流は、現在の松川を広くした状態で、このエリアではアルファベットの〔D又はd〕の丸い部分のような曲線形を描き、東は電気ビルから北のKNBビル(駅北)を經由し、現日赤病院の付近で、神通川本流に接続していた。その旧形状のままでは、大雨時に氾濫が頻発したので、明治30年から流路変更(「馳越線」はせこしせん)の改修工事を施工し、曲がりくねった本流を同36年までに直線化した。

この「馳越線工事」により、旧河川敷は、現在の県庁、市役所、電気ビル等の敷地に生まれ変わり、大規模な河川改修は、洪水防止と県都の発展に絶大な効果をもたらした。この事実さえ知る県民は少ない。

さて、神通川と言え、江戸時代は暴れ川のため、橋を架けても短期間で流失するため、昔から舟橋が有名な景観であった。小船を横に繋いで、その上に板を置いた舟橋をつくり人々を渡らせていた風景画が、(ます寿司の紙箱などに)描かれている。そこで、旧本流の名残りである県庁舎の南側に接する松川(城址公園に結ぶ橋の付近)に、その面影を忍ぶ縁(よすが)とするため、縮尺モデルの舟橋を復元し、さらに、川端に灯籠(舟橋北町の県森林水産会館玄関南に残る常夜塔)を復元コピーして配置できれば、桜の季節にも素晴らしい雰囲気醸すようになる。(なお、観光遊覧船の運行を妨げないため、可動性の小型舟橋に)

3 拠点施設における基本的な展示・紹介(その分野及び項目の例)

(1) 伝統と文化に関するPR映像、展示、

富山県の魅力と特長(観光、味覚、くすり、伝統文化、産業、歴史ロマンなど)を簡潔かつ不可欠な(重要語を含む)展示と短い映像を基に、ボランティア案内人などの説明を交え、紹介する

ア 観光(自然や景色を紹介するだけでなく、ロマンを売ることに配慮)

富をもたらず源の山 海拔ゼロから北アルプスの眺望、立山・黒部ルペンルートなどの山岳観光、世界屈指の急流と黒四などの電源開発、安政大地震による鳶山崩れと120年の治水・砂防など
「不思議の海」の「天然の生け簀(す)」 蟹気楼、富山湾内の魚の密度が天下一 ホタルイカ シロエビ 寒ブリなど

伝統の民謡と民家 五箇山民謡(こきりこ節、むぎや節、といちんさなど) 八尾のおわら 世界遺産の「合掌づくり集落」、砺波の散居(村)集落

イ 味覚(何処に「うまいもの店」があり、食することができるかにも配慮)

富山湾の幸 氷見の寒ブリ ホタルイカ、シロエビ&あいがめ(海底谷500km) 獲り過ぎない定置網漁法(越中人の生んだ伝統400年の農業遺産)

県産米 コシヒカリの育種は、新潟農試で系統掛け合せ、福井農試で「越南17号」に同定、新潟農試場長杉谷文之(上市町出身)が、新潟県の奨励品種に指定し命名。農林省の登録で普及させた。

ウ くすり(「なぜ富山に」の視点で歴史的概略と資料館など紹介)、

由来は、立山参詣の誘客のため、芦峠衆の御師が東海地方の壇那場に廻壇活動する際、護符のほか熊胆や牛黄などの生薬を持参販売から発祥。江戸城で2代藩主前田正甫公が腹痛の三春藩主に反魂旦を服用・回復させ、一躍、居並ぶ諸国大名から要請を受けて、全国に越中売薬(先用後利商法の配置薬業)開始した。ここでは主な資料館(県民会館分館金岡邸と富山市民俗民芸村)及び工場見学、販売所等を紹介する。

エ 高岡の銅器・鋳物(慶長以来400年)の技術から近代アルミ等・金属産業

加賀藩2代藩主の前田利長が高岡に入城、鋳物師を招き発展。伝統の寺院の梵鐘(全国9割)、銅器・置物など。技術は近年のアルミ産業(サッシ等建材は全国シェア4割)に繋がる。黒部でファスナー95%

オ 万葉のふるさと 越中国守(満5年赴任)の大伴家持

大伴家持は『万葉集』の全歌数4516首のうち473首を占める編纂者の一人。天平18(746)年から越中滞在中に詠んだ和歌などは、223首にのぼり、研究・普及拠点「高岡市万葉歴史館」が伏木国府にある。

カ 北前船と昆布ロード

江戸時代から発達した海上輸送により、日本海側では「北海道産の昆布、ニシン」と「越中産の米、稲藁(ワラ)製品(米俵・筥(ムシロ))との交易が、地元でバイ船と呼ぶ「北前船」により盛んに行われた。交易航路の主流は、北陸を拠点に蝦夷地(北海道)と瀬戸内海経由で、大阪に物資を運んだ。中には、中国大陸・チベットまで延びる所謂、昆布ロードで、薩摩経由の中国産薬種と昆布との密貿易もあった。

(2) 近代における富山県の発展(水力発電と日本海側有数の工業集積)に関する展示

ア 地勢と恵まれた自然 本県には、黒部川、神通川など6大川があり、しかも水量が豊富なため、平野は水田化され米作が中心となった。また、山岳地帯から富山湾まで近距離で急流であるため、水力発電が発達し、河口を利用して港湾海運の利便に恵まれた。現在でも、特定重要港湾伏木富山港からの中古車輸出は、(射水市在住のイスラム教徒らが扱い、ロシア経由で)毎年10万台単位である。

「富山の薬売り」の初代金岡又左衛門(薬種商)が実業家として電源開発に乗り出し、1899年(明治32年)神通川に大久保発電所を設置し、大正期から豊富な水、安価な電力、港湾運送の利便性などの恵まれた地勢に基づき、近代産業が集積した。例えば、日本鋼管(大正6年)、日本重化学工業、東亜合成(同7年)、十条製紙(同8年)、昭和初期に日産化学、日本カーバイド、昭和電工の前身など

県民所得は、兼業農家が工場勤務できるので、バブル以前は大都市圏に次ぐ地位にあった。今秋でも、米ハーバード大教員・院生らが、黒部市で「豊富な水資源と産業との関わりについて」実地授業するほど。

イ 各種生産品と日本一

アルミサッシ、ファスナー、たばこフィルター、医薬品生産、ゴールドウイン製品(五輪スポーツウエア、ノースフェイス、)など、米の種粳産地(市内日方江、庄川町)、黒四など水力発電量など

北陸における国の出先機関(農政局など)は金沢に置かれたが、北陸トップの銀行及び電力会社は富山に本社ある。(上記の金岡家のように売薬などで資本を蓄積した商人が積極的に起業した。)

ウ 県民性は勤儉質実で進取の気性に富む（註 数値データは古い）

県人氣質は、勤勉性と堅実性を備え、真面目で質素。全国でも、勤労者世帯実収入（共稼ぎ多く女性有業率74%、4位）が高い、一人あたり県民所得（340万円、5位）、平均貯蓄率（3割）、持ち家率（76%、2位）、1住宅あたり延面積（約143㎡、1位）など、いずれもトップ級である。そして、新しいものに挑戦する「進取の気性に富む」と言われ、明治以降、経済実業界で名をなした人も、次のように多数挙げできる。

エ 富山県輩出の偉人

(ア) 経済人 安田善次郎(安田財閥創始者)、浅野宗一郎(セメント工業、京浜工業地帯に貢献)、吉田忠雄(YKK創業)、正力松太郎(NTV)、大谷米太郎(ホテルニュー大谷)、青井忠治(丸井)など

(イ) 発明家 高峰譲吉(ジアスターゼ、アドレナリン)、[宇田新太郎](#)(八木・宇田アンテナの主導的研究)、川原田政太郎(TV発明の先覚者)、高松梅治([1910年](#)に無限軌道キャタピラを考案。英軍戦車に) 稲塚権次郎(南砺市城端出身、多収穫小麦「農林10号」の育種で「緑の革命」)、権次郎を後継し「コシヒカリ」を世に出した杉谷文之(上市町出身、新潟農試場長・NHKプロジェクトXで紹介)

オ 飛越交流ぶり・ノーベル街道(国道41号)

古くから越中ブリは飛騨高山経由で信州諏訪方面へ運ばれた。この国道41号沿線にノーベル賞受賞者との縁が深い不思議な事実あり。

生理学・医学賞 田中耕一(02年 化学賞、生体高分子特定法、富山市)、 本庶 佑(18年 医学生理学賞、オプジーボ、富山市) 利根川 進(87年 医学生理学賞、市内大沢野)

沿線の岐阜県内 神岡町(カミオカンデ関連) 物理学賞 梶田隆章(15年 富山市婦中町に在住)、 小柴昌俊(02年)、 化学賞 白川英樹(00年、高山市)

4 越中歴史ロマンの普及と視覚化で聖地巡り

隣の金沢(石川県)に観光客が多いのは、自然の景色・景観というよりは、加賀百万石の歴史・伝統と文化のロマンに依拠するところが、大きい。近年のTV(サスペンス・ドラマ等)番組の題材でも、金沢や能登を背景にする例は、富山と比較すれば、圧倒的に格差がある。このように観光には、ロマンという人の心を惹きつける魅力の存在が欠かせず、それは富山県に全く無いのではなく、ロマンの種は沢山存在しているのに、残念ながら、その価値に注目することなく未利用で放置されている。埋もれている全国又は世界レベルの越中歴史ロマンを、遅まきながら発信し、聖地巡りによる活用を考えることが望ましい。

特に、県庁周辺は、次のロマン候補の聖地巡りのスタート地点になる。北前船「長者丸」は岩瀬方面へ、竹内文書は巨磨氏の生誕(仙石町)・修行(荒町)地から久郷村の神殿跡、皇祖皇大神宮や県内の天皇陵へ。いずれも、文献(英文を含む)資料は豊富であるにも拘わらず、県内では、宝の持腐れである。速やかに、当該資料収集及び研究組織の育成を進めるなど、歴史ではなくロマンとして発信を図ることが考えられる。

本県の未開観光資源のうち全国レベルの代表は次の2つである。

県庁周辺エリアとの因縁と結びつきが深いので、出発地点に簡単な記念碑(説明板)を設置すれば、観光客や聖地めぐりのマニアの人々に注目され、回遊拠点として、普及し拡がる。

(1) 幕末(昆布ロードに就航)の越中北前船「長者丸」の漂流記と開国への功績

「長者丸」(船主の能登屋は薬種商で薩摩組の売薬)の船長平四郎(ホノルルで病死)の生地(木町・現桜木町)がエリアに隣接する。イオニア宮殿横の教会墓地に存在した木製墓標を松川縁に復元、設置する。ジョン万次郎より早く、1839年初冬に岩瀬の長者丸が金華山沖で漂流。米国捕鯨船が救助しハワイに1年滞在、アラスカを経て、43年に5人が択捉島の振別港に帰国し、幕末に膨大な海外情報をもたらした。その記録「蕃談」(幕府蕃書調所)は各藩エリートが競って読み、「時規物語」(加賀藩調書、彩色大和絵200余枚含む)など。(財)前田育徳会との版權交渉次第では、4K映像化や大河ドラマ化も夢ではない。捕鯨船内で漂民次郎吉が英語を習得し、逆に現地新聞に掲載された金銀交換率などの日本情報がワシントンに伝わり、ペリー艦隊派遣の機運が起こり開国を招く。Plummer女史は「初の日米親善大使」と賞賛。) 参考文献「時規(とけい)物語」(加賀藩)、「蕃談(ばんだん)」(幕府の調書、英・露・ハワイ語含む対比辞典も)、Katherine Plummer女史の著書「蕃談」(英訳)ほか「初めてアメリカを見た日本人」など

(2) 呉羽山で発掘された「竹内文書(たけのうちもんじょ)」と関連遺跡

文書を世に出した竹内巨磨氏の生誕地や修行地が富山城址公園の周辺にある。富山大学(五福キャンパス)西方の呉羽山中腹に皇祖皇太神宮も現存。ブームの聖地巡りに最適カードになり得る。

武内宿禰の子孫と称する竹内巨磨の家系が、6世紀以降呉羽山中に秘匿埋蔵された資料を明治末に公表したという。その内容は、荒唐無稽で気宇壮大な超古代ロマンで、正史とは異質である。

正史とされる「記紀」以外に存在する古史古伝の「先代旧事本紀大成経」(旧辞と同様に「古事記」元本)はじめ、「秀真伝(ホマツマエ)」(五七調の古代叙事詩)、「上記(ウヅミ)」(大分県立図書館蔵)などと並ぶ。「竹内文書」は、越中国世界中心説の発祥源である。関連文献や好事家も多数が存在するが、当然、日本の歴史学会(アカデミズム)は、これらを科学的ではないとして偽書扱いしている。その代表的なものは、

① 京都大学史学科教授の狩野亨吉(本書の献辞を含む本の写真7枚うち5枚が近世作と批判した)及び ② 郷土富山市出身で独学の文学博士山田孝雄(神宮皇學館大学長、文化勲章受章者)である。

富山市名誉市民山田氏は、市役所中庭に句碑「百千度くりかへしても読毎にこと新なり古のふみ」が建立されている。これも有力な聖地巡りの出発拠点となり、県内由緒地への巡礼者の回遊帰着地になる

このような経緯から、皇国史観及び唯物史観の双方から忌避され、史学界は研究をタブー視している実情にある。皇国史観全盛の1937年、竹内巨磨は不敬罪で起訴されたが、戦時中にもかかわらず、大審院(1944年12月1日、当時の最高裁三宅正太郎裁判長)は、不敬罪事件に、裁判所の権限を超えた宗教上の問題につき(異説の補充皇統も「否定できない」旨の)無罪判決を言い渡している。

(註 記紀では、皇統をウガヤフキアエズ尊(みこと)天皇は、一代に扱うが、本書は他の古史古伝と同様に鶺鴒葺不合朝73代の歴史を記述し、記紀のキセル史観と言われる部分を補充するとの説。)

また古代文字の宝庫、日ユ同祖論の草分けである。民謡の囃子詞「日本へブライ詩歌の研究」(川守田英二)説、キリストの墓説(青森県三戸郡戸来村)、県境宝達山麓のモーゼ公園(押水町)などが関連する。

参考文献 「神代の万国史」(竹内義宮)、 「THIS IS JAPAN」(Rowland G. Gould 著 朝日新聞発行69年)、 「世界史的研究に基づける古代日本史」(木村鷹太郎)、 「太古日本史」(岩田大中)など、